



No. sma0023

(2016.8.1)

サントリー美術館
「世界に挑んだ7年 小田野直武と秋田蘭画」展 開催
会 期：2016年11月16日（水）～2017年1月9日（月・祝）



重要文化財 不忍池図
小田野直武筆 一面
江戸時代 18世紀
秋田県立近代美術館

サントリー美術館（東京・六本木／館長 鳥井信吾）は、2016年11月16日（水）から2017年1月9日（月・祝）まで、「世界に挑んだ7年 小田野直武と秋田蘭画」展を開催します。

江戸時代半ばの18世紀後半、秋田藩の若き武士たちによって西洋と東洋の美が結びついた珠玉の絵画が描かれました。「秋田藩士が中心に描いた阿蘭陀風おらんだふうの絵画」ゆえに現在「秋田蘭画」と呼ばれており、その中心的な描き手が、小田野直武おだのなおたけ（1749～1780）です。本展は直武の画業を特集し、秋田蘭画の謎や魅力を探ります。

小田野直武の名を知らずとも、『解体新書かいたいしんしょ』の図は誰しも見たことがあるでしょう。直武は、秋田藩の角館かくのだてに生まれ、幼い頃より絵を得意としたといわれています。

安永2年（1773）に平賀源内（1728～1779）が鉾山調査で秋田藩を来訪したことをきっかけとして江戸へ上った直武は、源内のネットワークを通じて蘭学者に出会い、安永3年（1774）に『解体新書』の挿絵を担当しました。江戸では、ヨーロッパの学術や文化を研究する蘭学がまさに勃興し、また、南蘋派（なんびんは）という中国由来の写実的な画風が流行していました。江戸に出て7年後の安永9年（1780）に数え年32歳で亡くなるまで、直武は西洋と東洋という2つの世界に挑み、東西の美を融合させ、新しい表現を目指したのです。その画風は、第8代秋田藩主の佐竹曙山（1748～1785）や角館城代の佐竹義躬（1749～1800）らへも波及しました。主に安永年間（1772～1780）という短い制作期間ゆえに現存作品は少ないながらも、実在感のある描写、奥行きのある不思議な空間表現、プルシアンブルーの青空など、秋田蘭画は今なお斬新で驚異に満ちています。

本展では、小田野直武、佐竹曙山、佐竹義躬ら秋田蘭画の代表的な絵師を特集します。あわせて、直武に学んだとされる司馬江漢（1747～1818）が描いた江戸の洋風画などもご紹介します。東京で秋田蘭画と銘打つ展覧会は、2000年に板橋区立美術館で開催された「秋田蘭画～憧憬の阿蘭陀～」展以来、16年ぶりとなります。当館は、「美を結ぶ。美をひらく。」というミュージアムメッセージを活動の柱としてまいりました。江戸時代に洋の東西の美を結び、そしてひらいた直武らによる、日本絵画史上たぐいまれなる秋田蘭画の精華をご覧ください。

《 展示構成 》

第1章 蘭画前夜

直武は、寛延2年（1749）に秋田藩角館城代の槍術指南役の第4子として生まれました。角館は秋田藩主佐竹氏の一門である佐竹北家が治めた地で、同年に第6代角館城代となる佐竹義躬が生を受けました。前年の寛延元年（1748）には江戸の秋田藩邸で佐竹曙山（名・義敦）が生まれており、秋田蘭画の描き手たちは近い年齢だったことがわかります。

武家のたしなみとして書画を学んだ直武は、若い頃より画才を示したといわれ、秋田藩のお抱え絵師である武田円碩から狩野派を学びました。明和2年（1765）の「大威徳明王像図」は、直武17歳の時に依頼を受け制作した絵馬であり、早くからその画力が認められていたことがうかがえます。浮世絵風の作品なども伝わっており、幅広いジャンルの絵画を学んでいたようです。

本章では、秋田蘭画を描く以前に制作したと考えられる直武らの初期作品を中心に展示します。

【おもな出品作品】

だい い とく みょう おう ぞう ず
大威徳明王像図
か か び じん ず
花下美人図
いわ まつ ず
巖に松図

小田野直武筆 一面 明和2年(1765) 秋田・大威徳神社
小田野直武筆 一面 明和3年(1766) 角館總鎮守 神明社
佐竹曙山筆 一幅 江戸時代 18世紀 個人蔵

第2章 解体新書の時代～未知との遭遇～



『解体新書』(部分)

杉田玄白ら著、小田野直武画 一冊(序図)

安永3年(1774)

国立大学法人東京医科歯科大学図書館

安永2年(1773)7月に本草学・戯作・発明など多彩な才能を発揮したことで知られる平賀源内が鉱山開発のため秋田藩に招かれました。この出来事が直武にとって大きなターニングポイントとなります。ヨーロッパの文化や事情に通じていた源内が角館滞在中に直武へ西洋画法を教えたという伝承がありますが、近年の研究では疑問も投げかけられています。2人の出会いについて確かなことは不明ながら、源内が江戸に戻った後、直武は藩主佐竹曙山より「銅山方産物吟味役」の命を与えられ、同年12月に源内のいる江戸へ派遣されることになります。

江戸で直武が出会ったのが、最新の科学知識でした。第8代将軍徳川吉宗による漢訳洋書輸入の規制緩和以降、西洋の学問＝蘭学への関心が高まります。多士済々の人物たちと人的ネットワークを持っていた源内の周辺には、杉田玄白ら当代一流の蘭学者もいました。直武は源内の交友を通じて、杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らによる日本初の西洋医学書の翻訳『解体新書』の挿絵を描くことに抜擢されます。『解体新書』の刊行は安永3年(1774)8月、直武が江戸に出てわずか8ヶ月後のことでした。

直武は西洋の図像を手本に遠近法や陰影法など西洋画法を身につけていくことになります。本章では、蘭学資料や洋書など直武が対面したヨーロッパの図像を通じて、秋田蘭画の源流のひとつである西洋絵画の世界を探ります。

【おもな出品作品】

- 『ターヘル・アナトミア』 クルムス著、ディクテン訳 一冊 1734年
国立大学法人東京医科歯科大学図書館
- 『解体新書』^{かいたいしんしょ} 杉田玄白ら著、小田野直武画 一冊(序図) 安永3年(1774)
国立大学法人東京医科歯科大学図書館
- ファン・ロイエン^{ファン・ロイエン}筆花鳥^{かちょうず} 図模写^{もしや} 石川大浪^{いしかわたいろう}・孟高筆^{もうこう}、大槻玄沢^{おおつきげんたく}賛 一幅
寛政8年(1796) 賛 秋田県立近代美術館
- 『植物図譜』^{しよくぶつずふ} ドドネウス著 一冊 1618年 早稲田大学図書館

第3章 大陸からのニューウェーブ～江戸と秋田の南蘋派～

享保16年(1731)、長崎に来航した中国人画家沈南蘋^{しんなんびん}による写実的な画風は、当時の画壇に非常に大きな影響を与えました。吉祥性に富み、緻密で華麗な画風は全国に伝播し、南蘋派として武士階級はじめ広く受け入れられていきます。

南蘋派は、西洋画法とともに秋田蘭画の源流のひとつとされています。モチーフや画題、構図、細やかな描写など、南蘋派と秋田蘭画には共通項や類似点が多く見出されています。

直武が滞在した安永年間には江戸で南蘋派が大いに流行していた時期で、源内周辺には江戸に南蘋風花鳥画を広めた宋紫石^{そうしせき}(1715～1786)がおり、直武は宋紫石から様々な技法を学んだようです。

南蘋派が流行したのは秋田藩も例外ではありません。直武と近い時代では、秋田藩の横手城代戸村義敬^{とむらよしとか よしみち}・義通親子や2人をパトロンとして江戸や長崎で絵を学んだ佐々木原善^{ささきはらぜん}(生没年不詳)があげられます。秋田藩での南蘋派の受容は、秋田蘭画を考える上で重要なテーマのひとつでしょう。

本章では、江戸や秋田で活躍した南蘋派の作品をご紹介します、秋田蘭画のもうひとつの源流である東洋絵画の世界をみていきます。

【おもな出品作品】

- 風牡丹^{かぜぼたんず} 鄭培^{ていばい}筆 一幅 中国・清時代 18世紀
神戸市立博物館
- 富嶽^{ふかくず} 図 宋紫石^{そうしせき}筆 一幅 安永5年(1776) 大和文華館
- 牡丹^{ぼたん} 図巻^{ずかん} 松林山人^{しょうりんさんじん}筆 一卷 江戸時代 18世紀 個人蔵
- 菊花^{きっか}に蠶螂^{かまきり}・牡丹^{ぼたん}に蝶^{ちょう} 佐々木原善^{ささきはらぜん}筆 二幅 江戸時代 18～19世紀
秋田県立近代美術館

第4章 秋田蘭画の軌跡



重要文化財 唐太宗・花鳥山水
小田野直武筆 三幅
江戸時代 18世紀
秋田県立近代美術館



重要文化財 松に唐鳥図
佐竹曙山筆 一幅
江戸時代 18世紀
個人蔵

西洋と東洋の世界に向き合い、ヨーロッパの図像や南蘋風花鳥画の表現を学んだ直武は、拡大した近景と緻密な遠景を配した構図など独特の特徴をもつ秋田蘭画の画風にたどり着いたと考えられています。

東西美術が融合した秋田蘭画は、秋田藩主の佐竹曙山、角館城代の佐竹義躬ら直武周辺の人物たちへも波及しました。佐竹曙山は、幼少より絵を得意とし、安永7年（1778）には日本初の西洋画論である「^{が ほうこうりょう}画法綱領」「^{が とりかい}画図理解」を著しています。また、大名の間で流行していた博物学を愛好し、^{らん へき だい みょう}蘭癖大名であった熊本藩主^{ほそかわしげかた}細川重賢や薩摩藩主^{しまづ しげひで}島津重豪らとつながりがありました。佐竹義躬は、絵画や俳諧に通じ、角館生まれの直武とは親しい交流があったようです。直武は、安永6年（1777）に秋田に一時帰国し、翌年に曙山と再び江戸に上ることになりますが、この間に秋田藩内へ蘭画の画法が伝わったともいわれています。

東西のリアリズムが結びついた実在感のある描写、近景を極端に拡大し細やかな遠景を配する不思議な空間表現、船載のプルシアンブルーを用いて表された青空の色彩など、秋田蘭画は今なお見るものを魅了します。

本章では小田野直武や佐竹曙山らの高い画力が結晶した秋田蘭画を特集し、その軌跡を展観します。

【おもな出品作品】

- | | | | | |
|-----------------------------|--|-----------|-----------|-----------|
| 重要文化財 | ^{しのばすのいけ ず} 不忍池図 | 小田野直武筆 一面 | 江戸時代 18世紀 | 秋田県立近代美術館 |
| 重要文化財 | ^{とうたいそう} 唐太宗・ ^{か ちょうさんすい} 花鳥山水 | 小田野直武筆 三幅 | 江戸時代 18世紀 | 秋田県立近代美術館 |
| ^{に ほんふうけい ず} 日本風景図 | 小田野直武筆 二幅 | 江戸時代 18世紀 | 三重・照源寺 | |

富嶽図 <small>ふがくず</small>	小田野直武筆 一幅	江戸時代	18世紀	秋田県立近代美術館
蓮図 <small>はすず</small>	小田野直武筆、陸雨亭賛	一幅	江戸時代	18世紀 神戸市立博物館
牡丹図 <small>ぼたんず</small>	小田野直武筆 一幅	江戸時代	18世紀	個人蔵
児童愛犬図 <small>じどうあいけんず</small>	小田野直武筆 一幅	江戸時代	18世紀	秋田市立千秋美術館
鷺図 <small>さぎず</small>	小田野直武筆 一幅	江戸時代	18世紀	歸空庵 <small>きくうあん</small>
重要文化財	松に唐鳥図 佐竹曙山筆 一幅	江戸時代	18世紀	個人蔵
写生帖 <small>しやせいちよう</small>	佐竹曙山 三帖	江戸時代	18世紀	秋田市立千秋美術館
紅蓮図 <small>ぐれんず</small>	佐竹曙山筆 一幅	江戸時代	18世紀	秋田市立千秋美術館
蝦蟇仙人図 <small>がませんじんず</small>	佐竹曙山筆 一幅	江戸時代	18世紀	個人蔵
桜図 <small>さくらず</small>	佐竹義躬筆 一幅	江戸時代	18世紀	神戸市立博物館
紅毛童子図 <small>こうもうどうしず</small>	田代忠国筆 一幅	江戸時代	18世紀	神戸市立博物館

第5章 秋田蘭画の行方



三囲景

司馬江漢画 一面

天明3年(1783)

神戸市立博物館

安永8年(1779)、直武は秋田藩より突然に謹慎を命じられ、帰郷しました。同じ頃には平賀源内が人を殺めた咎で捕まり、獄死しています。そして、安永9年(1780)5月、直武は数え年32歳で亡くなりました。直武が謹慎を命じられた理由や死因の詳細はいまだ謎に包まれています。佐竹曙山も天明5年(1785)に死去し、源内・直武・曙山という秋田蘭画創始に関わった主要人物が相次いで世を去りました。

直武の制作期間は短いものでしたが、直武に学んだと考えられている人物として司馬江漢があげられます。江漢は、源内や蘭学者と交流し、鈴木春信から浮世絵を、宋紫石からは南蘋風花鳥画を学び、そして直武からも絵を習ったとされています。秋田蘭画が伝統的な画材で描かれたのに対し、江漢は銅版画・油彩画といった新たなジャンルを切り開いていきました。

秋田蘭画に再び光があてられるようになったのは、20世紀以降のことです。昭和5年(1930)には秋田生まれの日本画家平福百穂ひらふくひゃくすいによって『日本洋画曙光』が著され、本格的に秋田蘭画の再評価が進んでいきます。

本章では司馬江漢の作品など江戸の洋風画の一端をご紹介します。あわせて秋田蘭画の評価をめぐる、関連する人物や作品を展覧しながら秋田蘭画の行方をたどります。

【おもな出品作品】

かいひんぎよふず 海浜漁夫図 司馬江漢筆 一幅 寛政11年(1799) 大和文華館
みめぐりのけい 三囲景 司馬江漢画 一面 天明3年(1783) 神戸市立博物館
いはんていこうないしょうどうはんず 『医範提綱内象銅版図』 うだ がわしんさい あ おうどうでんぜん 宇多川榛齋著、亜欧堂田善画 一冊 文化5年(1808)
町田市立国際版画美術館

【本展における展覧会関連プログラム】

◎記念講演会「日本文化にとっての小田野直武」

講 師：田中優子 氏(法政大学総長)
日 時：11月27日(日) 14時～15時30分
会 場：6階ホール 定員：100名 対象：一般
聴 講 料：700円(別途要入館料) 応募締切：11月6日(日)

◎トークイベント

日 時：12月18日(日) 14時～15時30分
講 師：鴻池朋子 氏(美術家)
会 場：6階ホール 定員：100名 対象：一般
聴 講 料：700円(別途要入館料) 応募締切：11月27日(日)

「世界に挑んだ7年 小田野直武と秋田蘭画」展 開催

- ▼会 期：2016年11月16日(水)～2017年1月9日(月・祝)
※作品保護のため、会期中展示替を行ないます
- ▼主 催：サントリー美術館、朝日新聞社
- ▼協 賛：三井不動産、三井住友海上火災保険、サントリーホールディングス
- ▼会 場：サントリー美術館
港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3階
〈最寄り駅〉 都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8より直結
東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結
東京メトロ千代田線乃木坂駅出口3より徒歩約3分

【基本情報】

▼開館時間：10時～18時

※金・土、および12月22日（木）、1月8日（日）は20時まで開館

※いずれも入館は閉館の30分前まで

※shop×cafeは会期中無休

▼休館日：火曜日（ただし1月3日は開館）、

12月30日（金）～1月1日（日・祝）

▼入館料：一般1,300円、大学・高校生1,000円、中学生以下無料

※20名様以上の団体は100円割引

▼前売：一般1,100円、大学・高校生800円

サントリー美術館、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット、
イープラスにて取扱（各種プレイガイドは一般のみ販売）

※前売券の販売は9月10日（土）から11月15日（火）まで

※サントリー美術館受付での販売は9月10日（土）から10月30日（日）までの
開館日

▼割引：

■きもの割：きものでのご来館で100円割引

■HP割：ホームページ限定割引券提示で100円割引

■携帯割：携帯サイトの割引券画面提示で100円割引

■あとり割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で100円割引

※割引の併用はできません

▼点茶席（お抹茶と季節のお菓子）

1日限定50名（当日先着順） 1,000円（別途要入館料）

6階茶室「玄鳥庵」にて

日 時：11月17日（木）、12月1日（木）、8日（木）、22日（木）、
1月5日（木）

11時30分～17時30分（入室は17時まで）

13時、14時、15時にはお点前があります。

※点茶券は当日10時より3階受付にて販売（予約不可、お一人様2枚まで）

▼一般お問い合わせ：03-3479-8600

▼ホームページ：<http://suntory.jp/SMA/>

▽次回展覧会

「コレクターの眼」（仮称）

2017年1月25日（水）～3月12日（日）

▽プレスからのお問い合わせ：〔学芸〕内田、〔広報〕光田

TEL：03-3479-8604 FAX：03-3479-8644

メールでのお問い合わせ、及びプレス用画像ダウンロードのお申し込み：

8月1日（月）から http://www.suntory.co.jp/sma/info_press/

以 上